「よだかの星」論――よだかにおける神とその飛翔

竹原陽子

はじめに

宮澤賢治の童話「よだかの星」は、その末部において、よだかはまっすぐ空に向かって飛翔し、生の限界を脱して星となる。死の瞬間、死に逝く人に何が起こっているのか、生者にはわかり得ないが、「よだかの星」ではそこが迫真の描写をもって描かれている。死のそのとき、よだかは「はねをそれはそれはせわしくうごか」(注1)し、やがて力尽きて「のぼってゐるのか、さかさになってゐるのか、上を向いてゐるのかも、わか」らなくなり、「こゝろもちはやすらかに」なり、「青い美しい」星となるのである。

よだかの飛翔について考えるとき、いのちがどこから来てどこへ逝くのかという生命のもつ根源的な問いに触れる。そのため、作者宮澤賢治の宗教観や死生観も然ることながら、主人公よだかにとっての神の問題も看過できまい。

これまでよだかの飛翔については、多様な解釈がなされてきた。一群は、「よだかの星」が、賢治が「法華文学ノ創作」を志して創作した初期の作品であることを踏まえ、仏教思想の観点から読む解釈である。西田良子の「〝欣求浄土、厭離穢土〟の仏教思想から生れた寓話」とみて「宗教における超倫理的な解脱」とする解釈(注2)や、染谷昇の「他力本願から自力本願へ」という大乗仏教の教えを説こうとした説(注3)、また見田宗介による焼身による転生との見方(注4)、萩原昌好の〝修羅の成仏〟説(注5)、田口昭典の東北地方の「即身仏」に背景にみる理解(注6)などがある。他方、仏教思想に拠らない見解としては、北野昭彦による「不条理への怒りと原罪克服への痛切な祈り」(注7)として飛翔によだかの祈りをみるものや、清水真砂子の自己愛による自己燃焼として自我の問題と捉える解釈(注8)などがある。

このように賢治の宗教観や死生観の形成に大きな影響を与え

たと考えられる仏教思想からの考察や、祈りや自我といった神の問題とも近接する観点から論じられてきたが、これまでよだかと神との関係性についてはあまり論じられてこなかった。そこで本論では、よだかと神との関わりに注目して物語展開を追い、よだかの飛翔の過程と要因を考察する。また、そこからみえてくる宮澤賢治文学における「よだかの星」の位置づけについても考えたい。

一　神から与えられた名前

物語は、「よだかは、実にみにくい鳥です」の一文によって書き起こされる。よだかはそのみにくい容姿のために他の鳥から疎んじられ、名前の似る鷹から「名前をあらためろ」と迫られ、よだかは次のように答えている。

鷹さん。それはあんまり無理です。私の名前は私が勝手につけたのではありません。神さまから下さったのです。

よだかは、自分の名前は神から与えられたと考えている。斉藤孝は「名前は、アイデンティティである。よだかのアイデンティティを奪い尊厳を失わせ、自分との距離を大きくすることによって自分のプライドを高めようとするのが鷹の狙いである」(注9)と述べる。斉藤の指摘のとおり、名前はアイデンティティ、自己存在証明であり、改名の強制は存在の根を刈り取り、尊厳を奪う行為である。よだかはここで自分の存在の根は神にあることを表明している。それは、神から与えられたのが名前だけでなく、自己存在そのもの、いのちを神から与えられたとの認識が潜んでいる。

一般に子どもの名前はその生存に責任を持つ親などの保護者が付ける場合が多い。しかし、よだかの場合、親を通り越して生命の根源である神へと直結している。それがさほど違和感なく読み過ごせるのは、「よだか」という名が、一羽の個体を指し示すだけでなく、種を示す呼称という二重の意味を持たせられているからであろう。種を示す呼称は、牧恵子が「本来、名前とは共同体のなかでの位置づけ」(注10)であると指摘しているように、所属する共同体のなかで決まっていくもので、特別な事情のない限り、誰が名づけたのかは意識されることなく時代を超えて使用される。「よだか」という種の呼称も、過去、誰かが名付けたには違いないが、誰が付けたのか意識されることなく使用されている。名づけた者は「在る」には違いないが、誰かはわからない。その空白に、「在る」には違いない（と作中設定されている）が認知はできない「神」がはめ込まれている。

読者は、社会通念として「よだか」という種の呼称が神から名づけられることは有り得ないと承知しているにも拘らず、童話という枠組みも作用して、一種のトリックが成功して、ほとんど違和感無く読むことができるのである。

こうした「よだか」の名のもつ、個と種の二重性について、村瀬学は「『よだか』という名前が、状況A（引用者註・「みにくさから嫌われ者になる状況」）では『個人名』のように扱われつつも、『種の名』のように扱われている、という仕組みに、私たちはなんとも巧妙な仕掛けを読みとらざるを得なくなってくる。作者自身がこの辺のところをどこまで意識していたのかわからないが、作者を作品としてつきつめれば、この状況Aでは、個人的な刻印が社会的刻印に転化されてゆく状況を見のがすわけにはゆかない」と述べ、よだかは「『個人的な名』を越えたところのものの変更を迫られている」（注11）と読む。確かに巧妙な仕掛けはある。しかし、よだかはその名において個を越えた社会的刻印を迫られているだろうか。物語に「よだか」は一羽しか登場しない。しかも一羽のよだかが改名すれば、よだかの種族すべてが改名させられるという問題も描かれていない。弟はかわせみや蜂すずめである。この物語では、あくまでも個としての「よだか」が問題とされ、童話特有の擬人化によって種のもつ身体的特徴や習性が個の特徴として用いられているに過ぎない。「よだか」の語は、誰が名づけたかわからないという種の呼称の特質が利用されるものの、種族の背負う社会的意味はそぎ落とされているといえる。

このように「よだか」の名は、個を表わす呼び名としてだけでなく、種を示す呼称としての意味を限定的に含み、個と種という二重の意味を持たされている。こうした構造的仕掛けの上に、よだかの神との結びつきは巧みに表明されているのである。

よだかと神の結びつきについて、大藤幹夫は「よだかが、頑固なまでに鷹の主張を認めない背景に『神』への信仰がある」（注12）と述べている。よだかは鷹に改名を迫られるまで、どこまで神を意識して生きていたかどうかは不明であるが、鷹に問われたこのとき、自らの存在の根が神にあることを認め、神への信仰を表明したといえる。神への信仰とは、自らの存在理由を神に置き、意識的に神を基軸とした生き方を選ぶ態度を意味する。遠藤祐は、「鷹の脅迫にたいして、『名前』は『神さま』から受けたものと、このようにきっぱりと言えるのは、よだかに、自分が神の許に、神とともに生きているという確信があるからにほかならない」（注13）と受け取る。よだかの存在基盤は神に在る。よだかは、自らの根に神の存在を認め、鷹の要求を拒絶するこ

とで自らの尊厳を守り、神を基軸として生きることを選択したといえるのである。

二　生の孕む罪

さて、よだかは鷹に改名を迫られたその夜、虫を捕食する度に段階的に違和感を強め、三度目に虫を口にしたとき、遂に「大声をあげて泣き出」し、次のように述懐する。

（あゝ、かぶとむしや、たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される。そしてそのたゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される。それがこんなにつらいのだ。あゝ、つらい、つらい。僕はもう虫をたべないで餓えて死なう。いやその前にもう鷹が僕を殺すだらう。いや、その前に、僕は遠くの遠くの空の向ふに行ってしまはう。）

この場面のよだかのつらさは深刻である。よだかのつらさとは何か。よだかは、「たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される」ことと「たゞ一つの僕がこんどは鷹に殺される」ことがつらいと訴えている。

先行研究において一つの論点となっているのが、よだかのつらさが弱肉強食の食物連鎖に組み込まれていることへの気付きか否かである。伊藤眞一郎は「よだか自身のそれは生き物の世界の弱肉強食の掟に則った、生きるために不可避の殺生であるが、鷹の場合はそうではない。同じ名前の醜く弱い者の存在を許さない、強者の傲慢さからの殺生である」と述べ、食物連鎖とはいえないと指摘する（注14）。さらに伊藤は、清水真砂子の、「たゞ一つの僕」の語によだかの自己愛をみる説（注15）に触れ、「『ただ一つの僕』という言葉に目を向け、それに自尊の念を読まずにはいられない。（中略）『殺される』という言葉の繰り返しのうちに自覚されているが、ここには、強者・加害者としての罪悪感の方よりも、弱者・犠牲者としての自己愛惜の方に傾斜したよだかの意識が、仄見えている」と論じている。伊藤は、よだかのつらさは殺生の加害者としての罪悪感よりも、弱者・犠牲者としての自己愛惜に傾斜していると読む。

そうした理解に対し中野新治は、よだかの「僕はもう虫をたべないで餓えて死なう」という言葉が、「よだかの絶望の原因が食物連鎖の発見にあり、その鎖の一つになることを拒否しようとして餓死を願っているように読める」として、食物連鎖と解する読みにも一定の理解を示しながら、伊藤の論を踏まえ、よだかは「互殺の場所としての世界」という「世界の真相」に目覚めたと解し、「よだかの一連の独白は相当に強引な論理の

展開によって成り立っていることがわかる。（中略）作者はここでよだかを一挙に悲劇の主人公に仕上げたかったのであり、それによってよだかの知った『この世の真相』がいかに重いものであったかを語りたかったのである」と結論付ける（注16）。

正確に読めば、よだかの殺生と鷹のそれは、食物連鎖にはなっていない。伊藤、中野両者は、そこに立脚して論を展開している。伊藤は、よだかのつらさを自己愛惜への傾斜と読む理由について、「鷹に殺される恐怖・悲哀とよだか自身の殺生の罪の自覚・苦悩には距離があるからである。殺生の犠牲者としての苦しみが、殺生の加害者としての立場の自覚と苦しみにまで深まるには、よだか自身が、やはり、同じ生きるために不可避の殺生の犠牲者であるのが自然であろう」と述べている（注17）。しかしそれは、よだかの殺生と鷹の殺生がそもそも質の異なる罪だからではなかろうか。「虫を食さなければ生きていかれない」と、「虫を殺さなければ生きていかれない」という場合では、意味は異なる。食の問題はいのちの問題に直結し、生存の根幹に関わるが、「互殺」となれば社会原理の問題となる。よだかは、鷹に命をねらわれるまでは、「僕は今まで、なんにも悪いことをしたことがない」と思っていた。それが、鷹に命を脅かされた夜、自分も小さな羽虫を殺して食べて生きていたという罪に気が付く。鷹の強迫は、よだかの内なる罪への気付きをうながすきっかけとして重要な意味を持つ。よだかの気付きは、単に鷹のように自分も他の生き物を殺していたという気付きではない。虫を殺して食べなければいのちを保ってゆくことができないという、生の孕む内なる罪への気付きであり、目覚めである。中野が認めているように、よだかの発言から、よだかのつらさが食物連鎖であると捉えることは可能である。よだかの殺生と鷹のそれが食物連鎖の連環を結んでいないとしても、並列にして「互殺」と読むと、生の孕む罪に目覚めたよだかのつらさの本質は抜け落ちるであろう。

そして、「たゞ一つの僕」とは、自分だけが助かりたいというよだかの自己愛の表出であろうか。自己に執着していれば、そのすぐ前の一文は、「たくさんの羽虫が、毎晩僕に殺される」ではなく、あくまで主体は自己となり「毎晩僕は虫を殺している」となるのではないか。ここでよだかの視点は自己を離れ、殺される虫へと視点を移している。それは、よだかが殺される虫のつらさを自らのものとして実感しているからであろう。「たゞ一つの僕」とは、自分だけが助かりたいという自己に固執する言葉ではなく、自らの存在が神から与えられたただ一つの存在だという、いのちの唯一性を表わした言葉であり、自分

に殺される「たくさんの羽虫」もそれぞれに「たゞ一つの」いのちなのだという思いの表出である。それは自己執着や自己愛ではなく、神を内に持つ者の徹底した自己肯定とみるべきであろう。

ところで、ここでよだかが目覚めた生が根源的に孕む罪は、評者によって、様々に表現されてきた。西田良子（注18）をはじめ多くの論者によって仏教の基本概念の「業」と評され、天沢退二郎は「生存罪」（注19）と言い表わし、関口安義らはキリスト教用語の「原罪」と称した（注20）。いずれも生まれながらにして負っている根源的な「罪」のことである。そしてその罪は、神や仏といった聖なる世界と対峙しないかぎり、認められることのない「罪」といえよう。よだかも聖なる神の世界と対峙しなければ、捕食に対する罪意識をもつことはなかったのではないか。虫を食さなければいのちを保つことができないことに対する責任は、よだかにはない。よだかをそのように存在させた者の責任のはずである。聖なる世界への希求がなければ、あるがままの状態が肯定されるはずである。それは、罪のない聖なる世界があることを認め、自分がそこから離れていることを自覚して初めて生じる罪意識である。

物語は、冒頭、容姿という表層の問題から出発して、改名という自己存在証明の問題へ、そして捕食の問題へ移り、生が根源的に孕む罪の問題へと到達している。問題は、存在の表層から実存へ、実存からさらに神や聖と対峙する深層へと深化しているといえよう。

三　罪を超える選び

そうしてよだかは、自らの生の孕む罪を超えたいと願い、一案として、餓えて死ぬ道を挙げるが、それでは死ぬ前に鷹につかみ殺されてしまうため、二案として「遠くの遠くの空の向ふ」にいってしまおうと考える。

一案は、生物を食べないことで自分の生を罪から救う道で、その選びは死に直結し、自分の生を否定する自殺行為に等しく、生からの逃避である。また、鷹の脅威に対して何の対策もしなければ殺されるのを待つことになり、いずれにしても死へ向かう選びとなる。

二案は、神から与えられた自らの生を否定することなく、自ら「空の向ふ」へ行くことで聖へ飛び込む、積極的な生の超克といえる。結果的にそれは生から離れることになるが、生からの逃避ではない。

ところで、「そら」の描写は、よだかが一回目に虫を咽喉に入れた直後の場面で、「夜だかが思ひ切って飛ぶときは、そらがまるで二つに切れたやうに思はれます」と書かれている。よだかの飛行によって水平に区切られる空は、物語の末部においてよだかが垂直に飛翔して「そらへ」向い、生の限界を脱することから、よだかから下の領域が罪を内含する世界を表し、よだかから上の「そら」が天上へ広がる罪のない聖なる領域を表していると考えられる。ここで「遠くの遠くの空の向ふに行ってしまはう」と言うよだかの目指す「空」とは、天上へ広がる罪のない聖なる世界のことであり、肉体を保ったままでは行かれない、二度と帰ってこないと決意して行く場所であろう。

「空の向ふ」へ行くことを決したよだかは、お日さまに救いを求めて「矢のやうに」飛んで行き、次のように頼みかける。

どうぞ私をあなたの所へ連れてって下さい。灼けて死んでもかまひません。私のやうなみにくいからだでも灼けるときには小さなひかりを出すでせう。

ここでいう「みにくいからだ」とは、容姿だけでなく罪を内含する自己存在を意味していると考えられる。そのからだが灼けるとき、「小さなひかり」が生まれるという。見田宗介は、「よだかがその身を灼きつくすことを決意するのは」「存在の罪の認識からである」と述べ、「焼身自殺」という方法は、転生を信じていた賢治にとって「虚無へと向かうものとは異質のもの」であり、「あたらしい存在の光を点火する力」をもち、「このような存在の転回ということをとおして」、「原罪の鎖を解く道を見出しうる」と論じている（注21）。見田のいう通り、みにくいからだが灼けるときに生まれる「小さなひかり」は、罪のあるからだを灼いた後の、罪のない聖なる状態を意味しよう。しかし、肉体が灼けるときに光が生まれるかどうか、根拠はない。それでもよだかは確信している。確信以上に全存在を懸けてゆく。それは、よだかに聖なるものへの信仰があった証である。ここでよだかは、聖なるものへ自己存在を明け渡すことを決意し、宣言しているのである。

四　飛翔

しかし、お日さまは、よだかの苦しみに理解を示しながらも、よだかを天上へ連れて行ってくれない。よだかは遂に、草の上に落ち、一本の若いすすきの葉からしたたる「露」によって目覚めさせられる。「露」は、遠藤祐が「聖書にみえる《生きた水》ないしは《命の水》にほかならない」（注22）と指摘し、『聖

書』の「ヨハネによる福音書」第四章一四節の「わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る」などの記述を挙げて論じているように、ここで、「すすき」という自然を介してよだかにしたたった「露」は、死を超えて永遠の次元を生きるための天から与えられた《命の水》といえよう。このとき、よだかに聖なる永遠の次元に生きるための新たな息吹が与えられたのである。

そして、よだかは星に「どうか私をあなたのところへ連れてって下さい。灼けて死んでもかまひません。」と飛びながら叫ぶ。しかし、星にも願いは聞いてもらえない。よだかは落胆して再び地に落ち、「地面にその弱い足がつくといふとき、よだかは俄かにのろしのやうにそらへとびあがり」、天上へ向かって飛翔をはじめる。

「のろし」とは、空へ向かってまっすぐ上る煙である。煙は、空気よりも軽く、自然に上昇する性質をもつ。そこに力みは無い。「のろしのやうに」とは、よだかの飛翔の方向が垂直であることと、力んでいないことを表わしている。また、「のろし」には「革命ののろしを上げる」というように、「一つの大きなことを起こすきっかけとなる目立った行動」(注23)という意味もあり、これから起こるよだかの昇天も暗示させる。またここでは、それまで主人公よだかの目線で描かれていたものを、「のろし」の一語によって、読み手によだかが生きる世界を遠景で映し出し、飛翔する先の天上までを視野に入れている。

斉藤孝は、よだかの落下とその後の「垂直方向への上昇」に「決定的な『反転』」を見、「反転直前の落下において、よだかはすでに一度死んでいるとも言える。反転の瞬間よだかは再生し、『火』そのものとなったのである」(注24)と論じ、よだかの「落下」と「反転」は、死と再生を意味すると解している。また、竜口佐知子は「よだかにとって、『はねを閉ぢ』ることは、あらゆる行動を、『生』自体を放棄することである」(注25)と論じる。確かによだかの落下は、肉体の限界に達して「生」を放棄したという意味で、「死」を意味する姿といえる。そして、地に落ちたボールが跳ね上がるように、反転して垂直に跳ね上がる。飛翔の様は、落下物の質や重量によって決まるものである。「死」をもってまっすぐ落下したものは、天上までまっすぐ垂直に飛翔するのである。

小澤俊郎は、このようなよだかの落下と反転について「一種の原罪感に発心し、ひたすら私を捨ようと祈り行じ、力尽きたと思われる瞬間解脱する、という宗教の一公式を示したものではあるまいか」(注26)と論じる。力尽きて「死」したのちに飛

翔する力は、よだかの力ではない。外部から与えられた力、聖なる神の介在であり、確かにその反転は「宗教の一公式」といえるだろう。

そして、よだかは「そらのなかほど」で体をゆすって毛をさかだて、「キシキシキシキシキシッ」と高く高く叫ぶ。このよだかの姿は、存在の変容の一段階を表わしている。このときのよだかはもう醜いよだかではない。「まるで鷲」、「まるで鷹」のようであり、王者の風格を備えている。またそれまで言葉を話していたよだかの声は擬声音で表され、よだかがこの世の世界を脱して別の世界へ踏み込んだことが示されているだろう。そうして、よだかは「どこまでも、どこまでも、まっすぐに空にのぼって行き」、「寒さにいきはむねに白く凍り」「はねをそれはそれはせわしくうごか」し、やがて力尽きて「はねがすっかりしびれ」、「落ちてゐるのか、のぼってゐるのか、さかさになってゐるのか、上を向いてゐるのかも」わからなくなり、「こゝろもちはやすらかに」なり、「青い美しい光」となる。

こうしたよだかの飛翔について、恩田逸夫は「解脱への道は、他を頼ることによっては成就されぬことをしめしたもの」「結局、頼りになるのは自分だけである」「自己の特性（実存）に徹して、一つの高い次元の境地に到達した」（注27）と述べ、また染谷昇は、「星たちに断られたよだかは（中略）ようやく他力本願から自力本願に移って行く決心をする。（中略）修羅という奈落から生死を超越した涅槃の境地に飛び立とうとする時には、自力でなければならないとする大乗仏教の教えを、この場面で賢治は説こうとしたのであろう」（注28）と論じ、お日さまや星たちに連れて行ってほしいと頼む他力本願から、自力本願により自らの力で飛翔して転生に至ったと解釈している。しかし、これまで見てきたように、よだかは、垂直に飛翔をはじめる前の地に落ちる場面で自力の段階は終わって「死」に至っており、その後の飛翔は、「のろしのやうに」無力で跳び上がり始めている。反転後の飛翔は、肉体の死を迎えたよだかの、魂の飛翔ではないか。だからこそ、よだかは王者のように変貌し、死後の世界へ抜けるための壮絶な通過儀礼を経て、「青い美しい光」となるのではないか。「はねをそれはそれはせわしくうごか」す様は、いかにも自力で飛翔をしているようにも読み取れるが、そうではない。反転後、垂直方向へ空をめざす描写は、肉体の限界を越え、聖なるものへ自らを明け渡して死したよだかの魂の次元の姿であり、聖なる世界から与えられた新たな息吹によって、死後の世界へ向かう魂の軌跡が表された描写であろう。

よだかが、なぜ「光」になることができたのかという点について、竜口佐知子は「登場せずとも物語の背後に存在し続けた『神さま』が、よだかを『光』に変える『力』を持つ唯一の存在である」として、「よだかは、最後に『神さま』との〈関係〉によって、永遠の『光』となることになったのである」(注29)と述べながら、「しかし、作品中には、そのことを裏付ける証拠となるものは何もない」と続けている。しかしこれまでみてきたように、よだかにとっての神との関係に注目して作品を考察してみると、作中によだかと神の関係は確かに認められるのである。よだかは神を基軸にもって生き、神の聖なる世界と対峙することで自らの生の孕む罪に目覚めた。そして、聖なる世界を希求し、力尽きたとき、新たな永遠の命に至る水が与えられ、死を迎えると魂は垂直に飛翔し、永遠に燃え続ける「青い美しい光」になったのである。

最後に、作者宮澤賢治における「よだかの星」の位置づけについて考えてみたい。丹慶英五郎は、賢治には「原罪意識からの脱却とそれによる救済とを求める求道的な意欲」があり、「一匹の醜い無力なよだかに賢治は全自己を託して、広大な宇宙的構成のなかに、自己の宗教的ヴィジョンを実現せしめたのだという見方も出来なくはない。」(注30)と論じ、賢治が「よだかの星」において、原罪の問題に対する宗教的解放を求めて取り組み、自己の宗教的ヴィジョンを確立したと解する。そして、丹慶は、「だが、現実に『人間』が原罪意識から救済される唯一の道は、ついにどこにもありえないのか。賢治は少くともこの作品のなかでは、それに対して何ものも答えていない」と嘆く。確かに丹慶の述べているとおり、よだかのように身を灼き、死に至ることで原罪の問題を解決させる方法では、根本的な救済になってはいないだろう。しかし、丹慶が賢治は「自己の宗教的ヴィジョンを実現せしめた」と述べているように、賢治における「よだかの星」執筆の意味は、自らの魂の憩う罪のない聖域を創出したことにある。賢治は、「法華経童話ノ創作」の初期の段階で「よだかの星」を執筆し、自己の魂の聖域を確立した。そして、輝く自らの星を見上げながら、その後の多くの作品の執筆に取り組んでいったのではないか。「よだかの星」とは、実に「賢治の星」であったのではないか、と私は考える。

注1　本論文中の「よだかの星」の引用はすべて新校本宮沢賢治全集第八巻（筑摩書房、一九九五年九月）による。

2　西田良子「作品紹介〝よだかの星〟解説」（『四次元』別冊、一九五七年九月）

3　染谷昇「『よだかの星』の鑑賞」（『日本文学』、一九七〇年二月）
4　見田宗介『宮沢賢治――存在の祭の中へ』（岩波書店、一九八四年二月）
5　萩原昌好「『よだかの星』私見」（『国文学　解釈と鑑賞』、一九八四年一一月）
6　田口昭典『賢治童話の生と死』（洋々社、一九八七年六月）
7　北野昭彦「宮澤賢治『よだかの星』論―不条理への怒りと究竟の幸福への祈り――」（『立命館文学』、一九九五年七月）
8　清水真砂子「『よだかの星』論」（『日本児童文学』別冊、一九七六年二月）
9　斉藤孝「宮沢賢治の地水火風5」（『賢治の学校』第一〇号、一九九六年六月）
10　牧恵子「『よだかの星』の表現研究―呼称からの読み―」（『愛知教育大学大学院国語研究』、一九九四年三月）
11　村瀬学「越えられない状況を越える時」（『宮沢賢治』九号、一九九二年六月）
12　大藤幹夫「宮沢賢治の命名意識―「よだかの星」を中心に―」（『武庫川女子大学紀要教育学編』、一九七一年）
13　遠藤祐「ひとすじの物語―〈よだかの星〉はいかにして夜空にうまれたか―」（『学苑』、二〇〇三年二月）
14　伊藤眞一郎「宮沢賢治『よだかの星』試論（上）」（『安田女子大学紀要（一四）』、一九八五年）
15　注8に同じ。
16　中野新治「『よだかの星』―絶対的な問い―」（『宮沢賢治・童話の読解』翰林書房、一九九三年五月）
17　注14に同じ。
18　注2に同じ。
19　天沢退二郎「解説」（『新修宮沢賢治全集　第八巻』筑摩書房、一九七九年五月）
20　関口安義「『よだかの星』の世界―「悪より救い出したまえ」の祈り―」（『キリスト教文学研究』、二〇〇六年五月）
21　注4に同じ。
22　遠藤祐「『よだかの星』再読―聖書的視点から」（『キリスト教文学研究』、二〇〇七年五月）
23　『広辞苑第六版』（岩波書店、二〇〇八年一月）
24　注9に同じ。
25　竜口佐知子「宮澤賢治『よだかの星』論―〈関係〉の問題を中心に―」（『福岡大学日本語日本文学』第一四号、

二〇〇四年一二月）

26　小澤俊郎「『よだかの星』小論」（『四次元』、一九五二年一一月）

27　恩田逸夫「『よだか』の鳴き声」（『四次元』、一九五七年七月）

28　注3に同じ。

29　竜口佐知子「宮澤賢治『よだかの星』論―〈関係〉の問題を中心に―」（『福岡大学日本語日本文学』第一四号、二〇〇四年一二月）

30　丹慶英五郎『宮沢賢治』（日本図書センター、一九九三年一月）

（たけはら　ようこ／二〇一四年度博士前期課程修了）